

学童疎開

「おかあさん、はやく迎えに来て！」

空襲から子どもたちを守るために、大都市では、集団で学童疎開を始めた。出かけて行くときは、遠足気分でみんな元気よく出かけたが、疎開先も決して甘くはなかった。何か月ぶりかで疎開先の子どもに会ったとき、骨と皮ばかりにやせた子を見て、涙を流した母も多い。

食料がなく、わずかばかりの配給米、代用食では、お腹がいっぱいになることはなかった。たったひとつ落ちたご飯粒を取り合うことも。

シラミやノミがわいても、殺虫剤があるわけではなく、着ているものを熱湯で煮るしかなかった。病気で熱を出した子どもが、「おかあちゃん、おかあちゃん」と泣いても、看病してくれるのは、付き添いの先生であった。

豊橋では、集団疎開はなく、それぞれが田舎の親戚や知人宅を頼って、一時疎開することが多かった。中には、主な家財道具だけを疎開させることもあった。まだ豊橋は大丈夫、という気持ちもあったため、疎開が間に合わずに被災した家族も多かった。

『早咲きの花』（宗田 理 著）

豊橋を舞台とし、浅丘ルリ子主演の映画も、主人公が疎開をしていた幼い頃の回想を描いている。

本当の豊かさとは何だろう？

かつて食べ物も着る物も無い時代があった。

にもかかわらず、目を輝かせたくましく生きていた子どもたち。生きることの喜び。

命の大切さを子どもなりに実感していた。

そんな子どもたちを描きたかった。

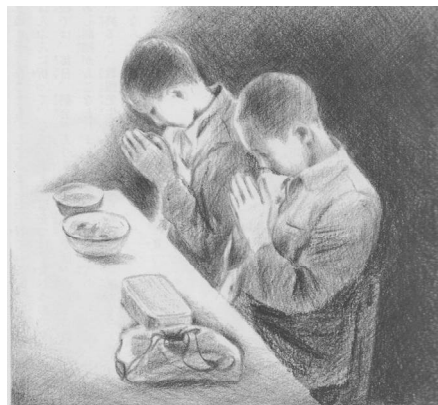
そんな子どもたちの延長線上に

私たちが生きているのだから。

そして、そんな子どもたちの歴史を

二度と繰り返さないためにも。

—菅原浩志監督のメッセージより—



一粒のお米も、そまつにいたしません。
兵隊さん、ありがとう。
福岡県教組編「戦争と子どもたち」
絵：働 正



防毒マスクをはめて遊ぶ
子どもたち
日本図書センター 発行



生きるために 羽田光江さんの体験



暮らした。また、窓ガラスには、紙テープを糊で米印に貼り、爆風で割れないように安全策をとった。

戦後も、食糧を求めて必死に

食糧難は、戦後になっても相当長い間続き、まともなご飯は求められず、代用食で補っていたが、その代用食も食べられない浮浪者が多くいた。今の神明公園の一带に、広くバラック建ての露天のようなもので、闇市があり、雑炊やだんご汁などを売っていて、行列を作って買い求める人たちがたくさんいた。

仕事も無く、お金も無く、家も家族も無く、一日一食ありつけばという人たちも少なくなかった。

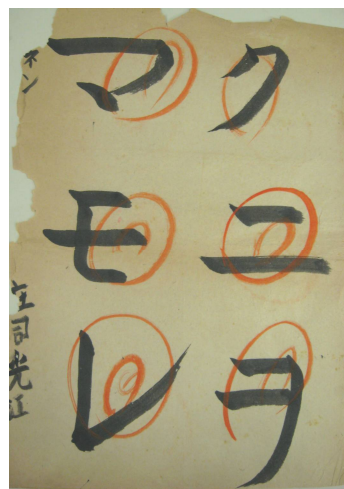
当時、叔父が名古屋勤務していて、名古屋はもっと食糧難だった。知人が買い出しに豊川市の長沢（羽田さんの疎開先）へ来たが、うちで農家を紹介して、やっと売ってもらうことができた。リュックサックに背負うのも大変な量を詰め、また両手にいっぱい持って「これで子どもたちにひもじい思いをさせずにすみ、とても嬉しい。」と喜んでいたので、今でも覚えている。親は子どもに食べさせるために必死な時代であった。

羽田さんは、昭和20年、豊橋市魚町に在住していて、空襲を受けた。当時、新川国民学校2年生だった。家は、伝平商店という米屋を営んでいたが、配給制になってから廃業した。昭和20年になると、敵機が来襲し、空襲となった。学校では、爆弾のときは、目と耳を両手で押さえて机の下にもぐる訓練をした。家では地下に掘った防空壕に入り、真っ暗い中にじっと潜んでいた。

日常生活は、燈火管制で、電気の傘に黒い布を被せて、光が外にもれないようにし、家族は茶の間に集まって、一つ灯りの下で



出征する叔父と共に



羽田さんが、学校で書いた書にも戦争が